

第47回神戸女学院大学 英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 松尾 歩

2022年11月4日は英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の向上を目的として設立された神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) の日でした。KCSESはリベラルアーツならではのコースや学問領域、世代の垣根を超えて、研究内容の話し合いに自由に参加できる貴重な学会であり、私は毎年この日を先輩からの贈り物だと思って楽しみにしています。今年(第47回目)は言語コミュニケーションコースの担当で、Zoomを使いオンラインにて開催することができました。

毎年前半は本学大学院文学研究科で学び、その後も研究を深く極めておられる修了生に発表をお願いしております。今回は本大学院文学研究科英文学専攻を優秀な成績で修了された中田麻央氏が担当してくださいました。演題はCoordinated Structures Involved Unlike Category Conjunctions and Nonconstituent Conjunctionsで、修士論文で考察された等位接続詞の構造の研究についての発表でした。とりわけ、等位接続詞は「名詞句and名詞句」のように左右が同じカテゴリーを接続すると信じられてきたのですが、(1) Pat became [a political radical] DP and [very antisocial] APのように冠詞句と形容詞句が接続されるような未解明の構文構成について解説いただき、どのような樹形図を使ったら(1)のような文を表現できるかの考察もしていただきました。

後半は関西学院大学総合政策学部教授のKevin Heffernan氏に、「Heavy Words: The Consequences of Word Weight in English and Japanese」と題して、特別講義をいただきました。Heffernan氏は本学で使用している社会言語学のテキストの著者で

いらっしゃいます。講演では英単語は重量に敏感で、脳が言語処理をするときに重たい(長い)単語はなるべく避けようとする、という特徴に言及され、もしその仮定が正しいのであれば、日本語は構造上、存在すべきではない言語であると説明されました。その後、90%の英語は2000単語からできており、英検1級に使用される語彙数は15000語であることから、そのほんの一部しか日常では使われていない、という現状を紹介されました。日頃考えることのない日英の比較を、社会言語学者の立場からお話いただき、その内容を斬新と感じた方々も多くいらっしゃったことと思います。

オンライン開催であったため、気軽に参加することができ、積極的な質疑応答もありました。また講演の録画を何度も聴き直すこともできました。自身の研究との関わりについて考えたり、違った分野の研究者にとっても、新しい視点を獲得することができるチャンスとなったのではないのでしょうか。最後になりましたが、この学会のためにご協力、ご支援くださいましたKCSESの会員の皆さまをはじめコミュニティーの皆さま、演者の皆さま、教職員にも御礼申し上げます。

第47回 KCSES

神戸女学院大学
英語英文学会

日時: 2022年11月4日(金)
14:00~16:00

場所: オンライン

※アクセス情報は参加申し込みいただいた方に、別途お知らせいたします。

参加をご希望の方は英文学科メールでお知らせください。
(e-office@mail.kobe-c.ac.jp)

研究発表 14:05~14:40

I 中田 麻央氏 (修士, 神戸女学院大学大学院文学研究科修士)
「Coordinated Structures Involved Unlike Category Conjunctions and Non-constituent Conjunctions」

特別講演 14:45~15:45

II Kevin Heffernan氏 (関西学院大学 総合政策学部教授, 博士<言語学>)
「Heavy Words: The Consequences of Word Weight in English and Japanese」



神戸女学院大学英文学科事務局

A New World in English 英語で、新しい未来へ

TEL: 0798-51-8548 e-mail: e-office@mail.kobe-c.ac.jp
KCSES WEBサイト: https://e.kobe-c.ac.jp/



特別講演

Heavy words: The consequences of word weight in English and Japanese

Kevin Heffernan

(関西学院大学 総合政策学部)



According to our current understanding of how language works, the Japanese language should not exist. Of course, the fact that the Japanese language exists implies that our current understanding is not correct, but that is the nature of scientific enquiry. Allow me to explain. The argument contains two parts: that words have weight, and consequently require work to produce; and that the human mind is lazy, and hates to work.

The weight of a word is an abstract approximation of how much effort is required to produce it. There are several factors that make words heavier. One such factor is frequency of use: commonly-used words are much easier to produce than rare words. Certainly, you have experienced struggling to recall a word and then finally producing it after some effort. The experience is described by the expression, “The word is on the tip of my tongue.” Our lazy brain strongly prefers to use only very frequently-occurring words. In fact, the most frequently-occurring word, “the,” accounts for 6.2% of all words produced, while the most frequently-occurring 50 words account for approximately half of all English produced. We only use rarer words when we absolutely must do so in order to communicate a specific message. This characteristic is true for all languages, not just English.

Given that individual words have weight, then the weight of a clause naturally increases as the number of words in it increases. Thus, the clause “my brother,” which contains only two words, is lighter than the six-word clause “my brother whose

birthday is today.” The weight of a clause has interesting consequences for language when we consider sentence structure. The meaning of a sentence comes from the relationship between the actors—the subjects and objects of the sentence—and the verb. As we process a sentence, we keep the actors in our short-term memory. The amount of effort required to do so depends on the weight of clause. Compare the following two sentences:

I made a cake *for* my brother whose birthday is today.

I made my brother whose birthday is today *a* cake.

In the case of the first sentence, we must keep the clause “a cake” in short-term memory until the end of the sentence. In the case of the second sentence, we must keep the clause “my brother whose birthday is today” in short term-memory until the end of the sentence. Thus, the second sentence requires more work, and consequently feels unnatural. Research on western languages has shown that farther away clauses are from the verb, the harder they are to process. Compare the distance that the rightmost clause is away from the verb in the example sentences to understand why.

Finally, let’s compare English with Japanese. English prototypical word order is subject-verb-object. In contrast, Japanese is subject-object-verb. Recall that the distance to the verb determines the amount of effort required to keep an actor in short-term memory. Comparing prototypical English with Japanese, we see that in the case of Japanese, the subject is always farther away from the

verb due to the intervening object, than in the case of English. Given that our minds are naturally lazy, then languages with subject-object-verb word order should be avoided. Yet, they are in fact the most common type of language in the world. Why? To answer this question, we require more research.

発表要旨

Coordinated Structures Involved Unlike Category Conjuncts and Non-constituent Conjuncts

中田 麻央

(神戸女学院大学文学研究科修士)

等位接続構文 (coordinated structure) の統語構造には以下3つの標準的な仮定があるとされている。1つ目は等位項 (conjunct) は同じ統語的カテゴリーであること、2つ目はそれぞれの等位項はその項を選択する要素 (selecting element) の選択的要求 (selectional requirement) を満たすこと、3つ目は等位接続構文は構成素を標的とすることである。しかしながらこれらに反する等位接続構文を見つけることは難しくはない。つまり等位項が異なる統語的カテゴリーであるものや、その項を選択する要素の選択的要求を満たしていないもの、非構成素を標的としている等位接続構文が存在している。これらの構文に対する主な分析として、2つの項が結合された等位接続構文は(異なる統語的カテゴリー同士の結合も含め)、すべての項に対してカテゴリー選択要求は満たされたうえで、2つ目の項においてはもともと1つ目の項と同じ統語的カテゴリー (large category) であり、省略 (ellipsis) を含んでいるという分析がされている。Bruening (2019) は異なる統語的カテゴリー同士の等位接続構文においては、等位項が構成素を成していないためにこの large category + ellipsis の分析を満たさないと述べ、PredP analysis を提案している。しかしながら、等

位項が構成素を満たす必要があるのかについての明確な理由は示されていない。それゆえ、この研究ではこれらの構文に対しても large category + ellipsis の分析が可能であることを Sailor and Thoms (2014) の分析を参考に提案する。Sailor and Thoms (2014) は非構成素の等位接続構文は実は vP または CP 同士の結合であり、2つの連続する操作、movement (移動) と ellipsis (削除) によって派生されると分析をしている。

この研究において、上記の3つの標準的な仮定を満たさない構文を large category と ellipsis の分析を通して改めて考え直し、これらの構文に対して large category vP-coordination and vP deletion with traces of movement operation in the second conjunct の分析を提案する。この分析の中で行われる movement と vP-deletion の操作は Sailor and Thoms (2014) に基づいている。彼らはこの movement は iland の中からは不可能だと述べるが、それに反する例も存在する。この研究では、移動操作は2つ目の等位項からの移動操作 (movement operation) は1つ目の等位項と同じ (identical) vP 構成をつくるために行われるとし、またその identity のために vP 削除が行われると考える。この分析により、等位接続構文の3つの標準的な仮定を満たさない構文も実はこの仮定を満たしているということを結論付ける。

国際学会発表(会員氏名ABC順)

*石川 有香 氏

“Metadiscourse markers used in Engineering dissertation abstracts”

インドネシア、Universitas Negeri Malang で開催された 20th Asia TEFL (2022年8月5-7日) にてオンラインで研究発表

“Corpus-based Study of Interactional Metadiscourse Markers Used in Abstracts in the Fields of Engineering”

オンラインの 2022 ALAK International Conference & AILA East-Asia Forum (2022年10月1日) にて招待講演

“Multidimensional Analysis of Engineering Research Abstracts: A New ESP Perspective” インドネシア、University Muhammadiyah Prof. DR. HAMKAにて開催されたthe 6th UHAMKA International Conference on ELT and CALL (2022年12月9-10日)にてオンラインで研究発表

会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

◇小杉 世 氏

『終わりの風景——英語圏文学における終末表象』(辻和彦ほか編著、春風社、2022年11月刊)
「〈終わりの風景〉の向こう側—インドラ・シンハの『アニマルズ・ピープル』とボパール、水俣、太平洋核実験」 pp. 177-201

◇奥本 京子 氏

『平和創造のための新たな平和教育：平和学アプローチによる理論と実践』(高部優子、奥本京子、笠井綾 編著、法律文化社、2022年1月25日刊)

- ・「プロローグ」(共著)
- ・第2章「平和教育のためのファシリテーション・アプローチ」 pp. 19-29 (単著)
- ・「エピローグ」(共著)
- ・第IV部「平和教育の実践：授業やワークショップのためのプログラム集」(共著)

“Theatre Arts in Peace Education: The Praxis at the Mindanao Peacebuilding Institute in the Philippines” (Kyoko Okumoto, Babu Ayindo, and Dessa Quesada Palm) pp. 109-129

Educating for Peace through Theatrical Arts: International Perspectives on Peacebuilding Instruction (Edited By Candice Carter, Rodrigo Benza Guerra, Routledge, 2022)

- ・Chapter 1: The History and Development of Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute (NARPI) 2009 ~ 2020 (Kyoko Okumoto and Jae Young Lee) pp. 8-30

・Chapter 3: Course Contents, “Conflict and Peace Framework” pp.186-191, “Arts-based Approach in Peacebuilding” pp.212-217

・Chapter 4: The Growing NARPI Tree: NARPI’s Development and Impact, “Peace Trainings in Japanese language” pp.237-239

Our Peacebuilding Story: The First Ten Years of Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute (2011-2020) (Edited by NARPI Book Team: Suyeon Kang, Kyoko Okumoto, Meri Joyce, Natsuha Kajita and Karen Spicher, Peacebuilding Press, August 1, 2022)

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も担当教員からの推薦による11名の応募を受けつけた。2月に英米文学文化、言語コミュニケーション、通訳・翻訳プログラム、グローバル・スタディーズの各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を以下の通り決定した。

英米文学文化 (応募者1名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E19105 大橋 美咲

言語コミュニケーション (応募者5名)

<最優秀賞>

E19141 蔦野 楓香

<優秀賞>

該当者なし

応用言語学(通訳・翻訳分野) (応募者2名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E19040 金田 沙樹

グローバル・スタディーズ（応募者3名）

<最優秀賞>

E19091 永山 友菜

<優秀賞>

E19026 飯田 春菜

E19063 胡桃澤 佑衣

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

(2010年 3月 2日改訂)

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。

(5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b) 運営委員会は、本学英文学科長と、本学英文学科教員若干名で構成されるものとする。

(c) 会費の取り扱いは学科会計委員が担当する。

附 則

この規定は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)

記念賞

2022年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

タルカット 記念賞 E20106 坂田 帆波

デフォレスト 記念賞 E20149 和田 文菜

キャンパスニュース

<退職>

*Sarah Olive客員准教授は、2023年3月に1年間の任期を終えられました。

<着任>

山崎幸治 教授 2023年4月

James G. Wong 教授 2023年4月

<新学部新学科設置構想中>

2024年4月、英文学科はその教育内容をより明確に打ち出しさらなる発展を目指すため、文学部から独立し、国際学部英語学科、グローバル・スタディーズ学科として新たに出発いたします。

内規

I. 大会での発表について

(1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、英文学科教授会で審議の上、決定する。

II. 参加費・経費について

- (1) 神戸女学院在職者、在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。遠隔による開催の場合はこの限りではない。
- (2) 郵送費などの経費は、英文学科予算から支出する。
- (3) 参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員と文学部事務室(英文学科)が担当する。

附 則

この内規は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)



編集後記

研究活動を報告してくださった会員の皆さまに感謝を申し上げます。今年の学会も残念ながらオンラインでの開催となってしまいましたが、リベラルアーツの精神に沿った様々な分野の研究に貢献しうる特別講演及び研究発表のおかげで、とても有意義な時間となりました。質疑応答に参加してくださった会員の皆さまや学生の皆さまにも感謝を申し上げます。なお、厚かましいお願いで恐縮ですが、神戸女学院教育振興会にご寄付を頂きます際には、「英文学科学生のために」と一言お書き添え頂けましたら幸いです。

皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

KCSES Newsletter 編集委員

(2022年度運営委員)

(ABC順)

○古東 佐知子 ○松尾 歩 ○立石 浩一 ○Goran Vaage

KCSES Newsletter No. 38

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

2023年3月発行